



## Interpersonal Behaviours Questionnaire-self (IBQs-J) の日本語版の開発および妥当性の検討

著者	肖 雨知, 外山 美樹
雑誌名	筑波大学心理学研究
巻	57
ページ	21-28
発行年	2019-02-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00154883">http://hdl.handle.net/2241/00154883</a>

# Interpersonal Behaviours Questionnaire-self (IBQs-J) の 日本語版の開発および妥当性の検討

筑波大学大学院人間総合科学研究科 肖 雨知

筑波大学人間系 外山 美樹

Development of the Japanese version of Interpersonal Behaviours Questionnaire-self and examination of its validity

Yuzhi Xiao (*Graduate School of comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Miki Toyama (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The objectives of the present study are to develop a Japanese version of the Interpersonal Behaviours Questionnaire-self (IBQs) and to validate it. The IBQs is a scale for assessing individual self-reports of interpersonal behaviours towards others based on Self-Determination Theory within the context of need-supportive and need-thwarting behaviours. The respondents were asked to self-report concerning their interpersonal behaviours towards people within their lives. Consistent with prior research, the results of confirmatory factor analyses revealed that a six-factor structure has the best model fit. Based on that analysis, we excluded item-9 from the subsequent analysis because of its low factor loading. These results support the validity of the scale and correlation analyses suggest that the subscales for need-supportive behaviours are positively correlated with basic need satisfaction and well-being, while the subscales for need-thwarting behaviours are positively correlated with basic need frustration and ill-being. We conclude that the IBQs-J is a valid scale for investigating self-reports concerning need-supportive and need-thwarting behaviours towards others.

**Key words:** need-supportive behaviours, need-thwarting behaviours, self-determination theory, basic psychological needs

人間は、何事に対しても意欲的に取り組む生き物ではない。進化発達心理学の知見によると、人間は、進化的歴史がなく、文化によって植え付けられた「二次的な能力」<sup>1)</sup> に対して自発的に取り組むことが難しいとされている (Bjorklund & Pellegrini, 2002)。

学校では、文章の読解や高度の計算などのような二次的能力の習得について、夢中に取り組める児童・生徒もいるが、説得されたり、強要されたりしなければ取り組まない児童・生徒もいる。また、職場では仕事にやる気がでない日は社会人の誰も経験するといっても過言ではないであろう。このように、学校、職場などの現代社会において不可欠な組織が、動機づけの質の低下の問題に直面している。そこで、動機づけの質の分類およびその規定要因に着目している自己決定理論 (SDT: self-determination theory; Deci & Ryan, 1985, 2000) は、この問題において、

1) これに対応して、Geary (1995) は、一次的能力を「淘汰圧を受け、祖先が直面した問題に対処するために進化した能力」と定義している。言語 (母語) や簡単な数量能力はその例である。

連絡先: [mtoyama@human.tsukuba.ac.jp](mailto:mtoyama@human.tsukuba.ac.jp) (外山美樹)

有益な知見を提供している。

SDTは、特定の行動に関与する理由がどれくらい自分の意志によるものかによって、従来の内発的動機づけ、外発的動機づけという動機づけの2分類をさらに細分化した。具体的には、内発的動機づけを内的調整とし、さらに外発的動機づけを自律性の程度の高い順から統合的調整、同一化的調整、取り入れの調整、外的調整に分類した(Deci & Ryan, 2008; Ryan & Deci, 2017)。自律性の高い動機づけは行動の持続を予測し、また特に深い情報処理や創造性を伴う複雑な課題のパフォーマンスにおいて効果的である。そのほか、well-beingにも関連することが示されている(レビューとして、Deci & Ryan, 2008)。

より近年のSDTの研究では、動機づけの自律性の程度を高める(以下、「動機づけの内在化」とする)要因として、3つの基本的心理欲求を充足する文脈が注目されている(Deci & Ryan, 2000; Ryan & Deci, 2017)。その3つの基本的心理欲求とは、自律性(autonomy)への欲求、有能感(competence)への欲求および、関係性(relatedness)への欲求である。自律性への欲求とは、行動を外的な要因によって強制的に生起することではなく、自らの意志で生起したいという欲求を指す。有能感への欲求とは、環境との相互作用の中で、自分のことを有能だと感じたいという欲求である。関係性への欲求とは、自分が大事にしている他者とつながっているという感覚への欲求のことである(Deci & Ryan, 2000; Ryan & Deci, 2017)。そして、これらの欲求は、他者との相互作用によって充足または挫折<sup>2)</sup>する。SDTでは、基本的心理欲求の充足または挫折に関連する行動は欲求支援・阻害行動(needs supportive/thwarting behaviour)と呼ばれている(Rocchi, Pelletier, Cheung, Baxter, & Beaudry, 2017)。

これまで、個人が欲求支援・阻害行動を受けることは、個人の基本的心理欲求の充足・挫折につながるため、動機づけの内在化やwell-beingを促進・妨害することが、多くの研究を通じて検証されてきた。例えば、Baard, Deci, & Ryan (2004)は、2つの会社において調査を行った結果、上司による自律性支援は、職員の欲求の充足を強く予測し、結果として、職員のパフォーマンスと職場における適応にポジティブな影響を及ぼすことを示した。また、Gagne (2003)は、体操選手を対象として、欲求支援行動と

動機づけとの関連を日誌法により調べた。その結果、コーチおよび両親による欲求支援行動が、選手の欲求の充足、長期的および日ごろの動機づけにポジティブな影響を及ぼすことが示された。そのほか、Bartholomew, Ntoumanis, Ryan, Bosch, & Thøgersen-Ntoumani (2011)は、アスリートを対象に自律性支援・阻害行動とwell-beingならびにill-beingとの関連を調べた結果、コーチからの自律性支援行動はアスリートの基本的心理欲求の充足、well-beingと正の相関を示した。一方、コーチによる自律性阻害行動はアスリートの基本的心理欲求の挫折、ill-beingと正の相関を示した。

これらの先行研究に共通している不十分な点として3つがあげられる。まず、1つ目として、先行研究のほとんどは、自律性の次元のみに着目しているという点である(例えば、Baard et al., 2004; Bartholomew et al., 2011)。前述したように、SDTは3つの欲求の重要性を同等であると仮定している。そのため、有能感および関係性欲求にかかわる行動を測定する必要がある。2つ目は、これまでの研究の多数が、欲求支援行動と欲求阻害行動を一次元的なものとして捉えているか、欲求支援行動のみに着目しているという点である(例えば、Baard et al., 2004; Gagne, 2003)。しかし、近年の研究では、欲求阻害行動の重要性が注目されるようになり、特にネガティブなアウトカムにおいて欲求阻害行動のほうの影響が強いことが、一部の研究によって示されている(例えば、Sheldon & Filak, 2008)。欲求支援行動と欲求阻害行動が共起する可能性および両者の相互作用の検討が不足していることも加味し、欲求支援行動だけでなく、欲求支援・阻害行動を同時に測定できる測度も必要だと考えられる。最後に、方法面における重大な不足点は、ほとんどの先行研究は、欲求支援・阻害行動の受領を扱っている点である。その場合、測定が個人内にとどまり、行動の提供および受領の間に生じるギャップを無視したまま、欲求支援・阻害行動の効果に言及することとなる。この点について、吟味する必要があるであろう。

3つ目の問題点と関連するが、欲求支援行動を提供することは、行動の受領者にだけでなく、行動の提供者にもポジティブな影響を及ぼすことが近年の研究により示唆されている。それは、他者に価値のあるもの(例えば、自律性支援)を提供する場合、人は他者に価値のあるものを与えられる有能感、および他者とつながっているという関係性の充足を経験するからである。また、人は自発的に支援行動を行っている場合が多いため、支援行動の提供は提供者の自律性欲求の充足につながる可能性も考えられ

2) 英語のfrustrationと対応している。「不満」と訳す研究者もいるが、dissatisfactionと区別して扱う研究者もいるため、本論文では「不満」ではなく、「挫折」と訳した。

る (Deci, La Guardia, Moller, Scheiner, & Ryan, 2006)。この仮説を支持する研究例として、以下の2つをあげる。Deci et al. (2006) は、親密な友人ペアを対象に友人関係における自律性支援の受領および提供がもたらす影響について研究を行った。その結果、友人に対して行う自律性支援は、提供者の基本的心理欲求の充足、個人レベルの well-being 指標 (ポジティブ感情の経験、幸福感、活力) および、関係レベルの well-being 指標 (関係満足度、開示) とすべて正の相関を示した。さらに、上記の相関関係は、友人から受けている自律性支援による影響とは独立したものであった。また、Cheon, Reeve, Yu, & Jang (2014) は、教師を対象に、自律性支援の提供が教師自身にもたらす効果を縦断的介入実験により調べた。その結果、生徒に対して自律性支援を提供する群に割り当てられた教師は、(教師の) 基本的心理欲求の充足、内発的動機づけ、活力および仕事への満足感においてより高い値を示した。

以上のことから、欲求支援・阻害行動の3次元(自律性、有能感、関係性)をすべて取り上げ、かつ行動の提供を測定できる尺度の開発は、欲求支援・阻害行動が行動の受領者にもたらす影響だけでなく、行動の提供者にもたらす影響への解明にも貢献できることを示している。しかし、そのような尺度は、本邦において見当たらない。そこで、本研究は、以上の3つの欠点をクリアした、かつ一定の妥当性が確認されている Interpersonal Behaviours Questionnaire-self (IBQs; Rocchi et al., 2017) の日本語版 (以下、IBQs-J とする) を開発することを目的とする。

## 目 的

本研究の目的は、具体的に以下の3点である。第1に、IBQsを邦訳する。その上で、全般的な重要な他者を対象とし、尺度の因子構造、内的一貫性および下位尺度間の相関を確認し、妥当性の構造的側面の証拠を検討する。第2に、Rocchi et al. (2017) を参考に、基本的心理欲求の充足・挫折、well-being、ill-being 指標との関連を確認し、他変数との関連に基づく妥当性の外的側面の証拠を検討する。そこで、先行研究の結果に基づき、以下の結果が予想される。a) Rocchi et al. (2017) と同様に、欲求支援行動の提供は、基本的心理欲求の充足と正の相関を示す一方、欲求阻害行動の提供は、基本的心理欲求の挫折と正の相関を示す。b) 先行研究 (Cheon et al., 2014, Deci et al., 2006) の結果を参考に、欲求支援行動の提供は、well-being 指標と正の相関を示すこ

とが予想される。欲求阻害行動の提供を直接に検討した先行研究が見当たらないが、Rocchi et al. (2017) では基本的心理欲求の挫折と正の相関が示されたことから、欲求阻害行動は ill-being 指標と正の相関を示すことが予想される。第3に、本研究は対象を限定していないため、欲求支援・阻害行動に一定の安定性が予想される。そのため、再検査信頼性の検討により、IBQs-J の一般化可能性の証拠を示す。

## 方 法

### 分析対象と手続き

2017年10月から2018年2月にかけて、関東圏内の大学に在学する学生を対象に同じ内容の質問紙調査を2~4週間間隔で2回実施した。調査対象者のうち、全体および部分有効回答者 (Time1: 男性133名、女性131名、不明2名、平均年齢20.22±1.39歳、Time2: 男性97名、女性112名、不明2名、平均年齢20.24±1.44歳) を分析対象とした。なお、Time1とTime2の両方に参加した対象者は152名であった (男性65名、女性87名、平均年齢20.05±1.43歳)。

### 倫理的配慮

本研究への協力に同意した者を調査対象者とした。調査は無記名であり回答は任意であること、回答の拒否や中断は可能であり、そのことによる不利益は生じないことなどを紙面に明記し、口頭でも伝えた。また、再検査法による信頼性を検討するため、携帯番号の下5桁の記入を求めた。携帯番号の記入は、個人を特定するためでなく1回目と2回目の回答を照合することが目的であること、破棄されるまで質問紙が厳重に保管されること、質問紙を回答することをもって本調査への同意とみなすことを紙面に明記し、口頭でも伝えた。なお、本研究は、筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を受けた上で調査を行った。

### 質問紙

以下の(1)~(6)から構成された<sup>3)</sup>。

(1) IBQs-J (原案) 原著の第1著者 Dr. Rochhi から IBQs の翻訳権を取得した後、1名の翻訳の専門家が日本語版に訳した。その後、日本語版の原案を心理学を専門とする大学教員1名、心理学専攻の大学院生3名が確認し、項目に修正を加えた。修正後の項目を、もう1名の翻訳の専門家によるバック

3) 同時に測定した項目は他にもあったが、本論文の目的と関係がないため、関連する記述を省略した。

トランスレーションを行った後、原著者による確認を受けた。修正指示を受けたいくつかの項目に指示通りに修正し、バックトランスレーションを再度行った。原著者から問題がないという判断を得たため、修正後の項目をIBQs-Jの原案として採用した。項目内容をTable 1に示す。教示文は、「あなた自身の行動について、おたずねします。次の各項目に当てはまる度合いを示してください。私にとって大事な人と一緒にいる時に、私は…」であった。24項目に対して、7件法（1…全く当てはまらない、4…どちらとも言えない、7…完全に当てはまる）で回答を求めた。

(2) 基本的心理的欲求の充足および挫折尺度  
Basic Psychological Need Satisfaction and Frustration

Scale (BPNSFS; Chen et al., 2015) の日本語版 (Nishimura & Suzuki, 2016) を使用した。24項目に対して、5件法で評定を求めた。

(3) ポジティブ・ネガティブ感情尺度 Positive and Negative Affect Schedule (PANAS; Watson, Clark, & Tellegen, 1988) の日本語版 (川人・大塚・甲斐田・中田, 2011) を使用した。20項目に対して、6件法での評定であった。

(4) 人生満足度尺度 Satisfaction with Life Scale (SWLS; Diener, Emmons, Larsen, & Griffin, 1985) の日本語版 (大石, 2009) を使用した。5項目に対して、7件法で評定を求めた。

(5) 活力尺度 Subjective Vitality Scale (SVS; Ryan & Frederick, 1997) の日本語版 (高山, 2015)

Table 1  
IBQs-Jの確認的因子分析の結果

	因子負荷量	
	Time1	Time2
<b>I. 自律性支援行動</b>		
5 相手の好きなように選択させる。	.64	.42
6 相手の判断を支持する。	.84	.73
1 相手が行う選択を支持する。	.81	.81
24 相手が自ら決心するよう励ます。	.50	.57
<b>II. 自律性阻害行動</b>		
3 私のやり方でやるよう相手にプレッシャーを与える。	.87	.88
16 私の意見を相手に押し付ける。	.85	.82
23 ある特定の行動を選ぶよう相手にプレッシャーを与える。	.77	.74
2 相手の選択肢を制限する。	.60	.75
<b>III. 有能感支援行動</b>		
8 相手に価値のあるフィードバックを与える。	.58	.58
4 相手が目標を達成できるであろうと言う。	.79	.64
18 相手に物事を成し遂げる力があるということを伝える。	.73	.81
<b>IV. 有能感阻害行動</b>		
15 相手が失敗するだろうということを指摘する。	.65	.62
19 相手に能力がないというメッセージを伝える。	.54	.58
12 相手が改善できないのではないかと疑う。	.68	.70
17 相手の課題を克服する能力を疑う。	.68	.75
<b>V. 関係性支援行動</b>		
21 相手が行うことに興味を持っている。	.79	.76
13 時間をとって相手のことを知ろうとする。	.76	.73
22 相手と一緒にいることを素直に楽しんでいる。	.75	.77
11 相手のことをよく理解している。	.56	.47
<b>VI. 関係性阻害行動</b>		
7 相手が落ち込んでいるときに慰めない。	.69	.76
20 相手と一緒に過ごしていてもよそよそしい。	.77	.73
10 相手と気持ちが通じていない。	.64	.68
14 相手を気にかけていない。	.54	.64

を使用した。7項目に対して、7件法で評定を求めた。

(6) 社会的望ましき尺度 Balanced Inventory of Desirable Responding (BIDR; Paulhus, 1991) の日本語版(谷, 2009)のうち、「印象操作」の12項目を使用した。各項目に対して、7件法で評定を求めた。

結果と考察

IBQs-J における確認的因子分析およびモデル間の比較

Rocchi et al. (2017) と同様に、6 因子モデルだけではなく、3 因子モデル(自律性・有能感・関係性それぞれ8項目ずつ)と2 因子モデル(欲求支援行動・欲求阻害行動それぞれ12項目ずつ)についても、確認的因子分析を行い、モデル間の適合度を比較した。その結果、Time1, Time2において、ともに6 因子モデルがもっとも高い適合度を示し(Time1, Time2順に、 $\chi^2=588.72, .587.27, df=237, 237, GFI=.83, .80, CFI=.85, .84, RMSEA=.08, .09, AIC=788.76, 781.09$ )、Rocchi et al. (2017) の結果と整合した。しかし、項目9の「相手のスキルを改善するよう促す」は、2 時点においてともに.40以下の負荷量を示した。そのため、項目9を除いた6 因子のモデルにおいてもう一度確認的因子分析を行った。その結果、修正前のモデルより適合度は良好になった(Time1, Time2順に、 $\chi^2=588.72, .587.27, df=215, 215, GFI=.84, .81, CFI=.87, .84, RMSEA=.08, .09, AIC=710.72, 709.27$ )。各下位尺度における Cronbach の $\alpha$  係数は.71~.87に収まり、Rocchi et al. (2017) で報告されている IBQs の $\alpha s=.77\sim .82$ と同程度の値が示された。以上の結果から、項目9を除いた6 因子モデルを採用し、23項目を以降の分析に用いた。

IBQs-J における下位尺度の相関

IBQs-J の各因子の項目の平均値を算出し、各下位尺度得点とした。下位尺度の記述統計量および下位尺度間の相関係数を Table 2 に示す。2つの時点において、3つの欲求支援行動の間に正の相関が示された(Time1, Time2順に、 $prs=.56\sim .69, prs=.43\sim .65, ps<.001$ )。また、3つの欲求阻害行動の間に正の相関が示された(Time1, Time2順に、 $prs=.43\sim .61, prs=.52\sim .65, ps<.001$ )。Rocchi et al. (2017) で報告されている IBQs の相関係数 ( $prs=.61\sim .70$ ) とほぼ同程度の値が示された。

IBQs-J と BPNSFS との関連

BPNSFS の $\alpha$  係数は、いずれも十分な値( $\alpha=.73\sim .84$ )であったため、平均値を算出し、各得点とした。Rocchi et al. (2017) では、社会的望ましさを共変量として投入したため、それに倣い、以降の相関分析において、社会的望ましさを統制し、偏相関係数を算出した。まず、基本的心理欲求の充足との相関係数を算出した(Table 3)。その結果、2の時点において、3つの欲求支援行動と3つの欲求の充足の間に正の相関が示された(Time1, Time2順に、 $prs=.15\sim .58, ps<.05, prs=.21\sim .59, ps<.01$ )、ただし、Time2における自律性支援行動と有能感欲求の充足との相関係数.12は有意傾向)。次に、基本的心理欲求の挫折との相関係数を算出した。その結果、Time1において、自律性阻害行動と自律性欲求の挫折との間に有意な相関がみられなかったが( $pr=.05, n.s.$ )、有能感・関係性欲求の挫折との間に正の相関がみられた( $prs=.16, .26, ps<.05$ )。また、有能感・関係性欲求阻害行動は3つ欲求の挫折の間に正の相関が示された( $prs=.15\sim .41, ps<.05$ )、ただし、有能感阻害行動と自律性欲求の挫折との相関係数.12は有意傾向)。Time2において、3つの欲求阻害行動と3つ欲求の挫折の間に正の相関が示された( $prs=.15\sim .46,$

Table 2  
IBQs-J の下位尺度間の相関係数及び記述統計量

	相関係数						M		SD		$\alpha$	
	1	2	3	4	5	6	Time1	Time2	Time1	Time2	Time1	Time2
1. 自律性支援行動	—	-.31***	.56***	-.33***	.56***	-.39***	5.19	5.21	0.89	0.80	.78	.87
2. 自律性阻害行動	-.43***	—	-.05	.61***	-.18***	.43***	2.72	2.63	1.19	1.19	.85	.71
3. 有能感支援行動	.43***	-.08	—	-.17**	.69***	-.44***	4.80	4.73	1.05	1.02	.73	.73
4. 有能感阻害行動	-.37***	.65***	-.25***	—	-.27***	.56***	2.97	2.82	1.07	1.07	.73	.76
5. 関係性支援行動	.44***	-.25***	.65***	-.33***	—	-.57***	5.15	5.14	1.02	0.93	.81	.78
6. 関係性阻害行動	-.32***	.52***	-.46***	.60***	-.66***	—	2.70	2.66	1.05	1.05	.75	.80

注) 相関係数は右上が Time1, 左下が Time2の結果を示す。

\*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$

Table 3  
IBQs-J と各尺度との相関係数

	基本的心理欲求の充足			基本的心理欲求の挫折			well-being 指標			ill-being 指標
	自律性	有能感	関係性	自律性	有能感	関係性	PA	SWLS	SVS	NA
Time1										
自律性支援行動	.15*	.16*	.39***	-.01	-.16*	-.23***	.06	.13*	.12 <sup>†</sup>	-.15*
自律性阻害行動	.00	.14*	-.08	.05	.16*	.26***	.21**	-.01	.06	.26***
有能感支援行動	.20**	.36***	.43***	-.09	-.23***	-.21**	.19**	.13*	.24***	-.08
有能感阻害行動	-.08	.10 <sup>†</sup>	-.19**	.12 <sup>†</sup>	.17**	.22***	.06	-.11 <sup>†</sup>	-.07	.20**
関係性支援行動	.26***	.30***	.58***	-.09	-.26***	-.27***	.12 <sup>†</sup>	.22***	.23***	-.12 <sup>†</sup>
関係性阻害行動	-.16*	-.12 <sup>†</sup>	-.47***	.15*	.30***	.41***	-.01	-.20**	-.18**	.26***
Time2										
自律性支援行動	.21**	.12 <sup>†</sup>	.29***	.02	-.04	-.20**	.00	.13 <sup>†</sup>	.01	-.08
自律性阻害行動	-.16*	-.03	-.22**	.23**	.15*	.35***	.20**	-.02	.07	.31***
有能感支援行動	.35***	.35***	.45***	-.08	-.16*	-.16*	.21**	.33***	.25***	-.11
有能感阻害行動	-.21**	-.07	-.32***	.21**	.27***	.35***	.16*	-.16*	-.03	.37***
関係性支援行動	.32***	.35***	.59***	-.14 <sup>†</sup>	-.29***	-.39***	.09	.34***	.25***	-.19*
関係性阻害行動	-.27***	-.26***	-.61***	.32***	.43***	.46***	.07	-.31***	-.14*	.36***

注) すべて社会的望ましさを共変量として入れた後の値を示す。PA: ポジティブ感情, SWLS: 人生満足度, SVS: 活力, NA: ネガティブ感情。

<sup>†</sup>  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

$ps < .01$ )。以上の結果から、1時点目の自律性阻害行動を除くすべての欲求支援・阻害行動はそれぞれ欲求充足・挫折と正の相関を示したため、概ね予測通りの結果が得られたと言えよう。

### IBQs-J と PANAS, SWLS, SVS との関連

PANAS, SWLS, および SVS の  $\alpha$  係数は、いずれも良好な値 ( $\alpha = .86 \sim .92$ ) であったため、逆転項目を処理した上で平均値を算出し、各得点とした。まず、2つの時点において、欲求支援行動と PANAS, SWLS, SVS との相関係数を算出した (Table 3)。その結果、PANAS のポジティブ感情において、2つの時点において、有能感支援行動とともに正の相関を示した (Time1, Time2 順に、 $prs = .19, .21, ps < .01$ )。Time1 において、SWLS は3つの欲求支援行動と正の相関を示し ( $prs = .13 \sim .22, ps < .05$ )、Time2 において、SWLS は有能感・関係性欲求支援行動と正の相関が示し ( $prs = .33, .34, ps < .001$ )、自律性支援行動と有意傾向の正の相関 ( $pr = .13, p < .10$ ) を示した。SVS において、2時点ともに、有能感・関係性支援行動と正の相関が示された (Time1, Time2 順に、 $prs = .23 \sim .24, ps < .001, prs = .25, ps < .001$ )。次に、欲求阻害行動とネガティブ感情との相関係数を算出した。PANAS のネガティブ感情において、2時点ともに、3つの欲求阻害行動と正の相関が示さ

れた (Time1, Time2 順に、 $prs = .20 \sim .26, ps < .01, prs = .31 \sim .37, ps < .001$ )。一方、予想外の結果もいくつかみられた。2つの時点において自律性阻害行動とポジティブ感情の間に正の相関がみられ (Time1, Time2 順に、 $prs = .21, .20, ps < .01$ )、Time2 において、有能感阻害行動とポジティブ感情との間に正の相関がみられた ( $pr = .16, ps < .05$ )。以上、すべての欲求支援行動は少なくとも1つ以上の well-being 指標と正の相関を示し、すべての欲求阻害行動は ill-being 指標と正の相関を示したため、概ね予測通りの結果が得られたと言えよう。

### 再検査信頼性

IBQs-J の再検査信頼性を検討するため、IBQs-J の各得点について2時点間の単相関係数を算出した。その結果、いずれも十分な再検査信頼性が示された ( $rs (152) = .56 \sim .76, ps < .001$ )。

### 総合的考察

本研究の目的は、IBQs-J を作成し、その妥当性を検討することであった。そのため、まずは確認的因子分析および内の一貫性の検討により、構造的側面の証拠を確認した。その結果、項目9は、2つの時点においてともに低い負荷量を示した。その原因と

して、トランスレーションを行う際に、言葉のニュアンスにずれが生じたことが考えられる。具体的に、項目9の原文“Encourage them to improve their skills.”の“improve”を「改善」と訳したところである。日本語では、「改善」は「悪いところを改めてよくする。」というネガティブ評価の意味が含まれているため<sup>4)</sup>、同下位因子のほかの項目との間にずれが生じたことが考えられる。そのため、本論文は、最終的に項目9を除いた23項目を採用した。次に、BPNSF、PANAS、SWLS、SVSとの関連に基づき、IBQs-Jの外的側面の証拠を一部確認できた。最後に、再検査信頼性を検討した結果、いずれの下位尺度においても十分な再検査信頼性が示されたため、IBQs-Jの一般化可能性の側面の証拠を一部確認できた。以上、欲求支援・阻害行動の提供を測定するために、IBQs-Jは一定の妥当性を持つ測度であろう。

本研究の限界および展望について2点述べたい。1つ目は、2つの時点において、自律性・有能感欲求阻害行動と欲求の挫折との相関係数 (Table 3) に変動があった点である。欲求支援行動と欲求の充足との相関に同様な変動が見られなかったことから、欲求阻害行動と欲求の挫折との相関は、欲求支援行動と欲求の充足との相関を比べて、他の概念によってより左右されやすいことが考えられる。そこで、1つの可能な解釈として、行動の提供と結果変数 (欲求の充足・挫折) の間に、その行動を引き起こす理由、いわゆる動機づけの質 (Deci & Ryan, 2002) が考えられる。欲求支援行動の内容を見る限り、「相手のため」という欲求の充足につながる動機づけを含む場合が多いことが推察される。一方、欲求阻害行動は、場合によって、ネガティブなアウトカムにつながる動機づけによって生起する可能性も考えられる。例えば、自律性阻害行動である「私の意見を相手に押し付ける」は、場合によっては、親しい他者に対する「甘え」の行動である可能性も考えられる。同様に、有能感阻害行動である「相手が失敗するだろうということを指摘する」は、場合によっては、親しい他者のことを考えて、好意にアドバイスをしているだけかもしれない。実際、相関分析の結果 (Table 3) をみると、自律性・有能感阻害行動は、ポジティブ感情と正の相関を示すと場合もあることが分かる。しかし、この解釈はあくまで推測であり、将来、行動の動機づけを含めた検討が必要で

あろう。

2つ目は、今回の研究はあくまでも妥当性のごく一部しか検討できていない点である。今後は、項目9の改訂を踏まえたうえで、他の変数との関連 (例えば、他の well-being, ill-being の指標や、動機づけの内化化など) を検討したり、ペアデータによる行動の提供および受領を同時に検討したりすることなど、IBQs-Jの妥当性を確認すべきであろう。

## 引用文献

- Baard, P. P., Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2004). Intrinsic Need Satisfaction: A Motivational Basis of Performance and Well-Being in Two Work Settings 1. *Journal of Applied Social Psychology, 34*, 2045-2068.
- Bartholomew, K. J., Ntoumanis, N., Ryan, R. M., Bosch, J. A., & Thøgersen-Ntoumani, C. (2011). Self-determination theory and diminished functioning: The role of interpersonal control and psychological need thwarting. *Personality and Social Psychology Bulletin, 37*, 1459-1473.
- Bjorklund, D. F., & Pellegrini, A. D. (2002). *The origins of human nature: Evolutionary developmental psychology*. American Psychological Association.
- Chen, B., Vansteenkiste, M., Beyers, W., Boone, L., Deci, E. L., Van der Kaap-Deeder, J., ... & Ryan, R. M. (2015). Basic psychological need satisfaction, need frustration, and need strength across four cultures. *Motivation and Emotion, 39*, 216-236.
- Cheon, S. H., Reeve, J., Yu, T. H., & Jang, H. R. (2014). The teacher benefits from giving autonomy support during physical education instruction. *Journal of Sport and Exercise Psychology, 36*, 331-346.
- Deci, E. L., La Guardia, J. G., Moller, A. C., Scheiner, M. J., & Ryan, R. M. (2006). On the benefits of giving as well as receiving autonomy support: Mutuality in close friendships. *Personality and Social Psychology Bulletin, 32*, 313-327.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. Springer Science & Business Media.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The “what” and “why” of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological*

4) 実際、2つの時点における下位尺度の項目間の相関を確認したところ、項目9だけが他の有能感支援行動の項目との間に.20程度の低い相関を示し、さらに、一部の有能感阻害行動の項目と正の相関を示した。



- inquiry*, 11, 227-268.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2002). Overview of self-determination theory: An organismic dialectical perspective. *Handbook of self-determination research* (pp.3-33). Rochester: University of Rochester Press.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2008). Facilitating optimal motivation and psychological well-being across life's domains. *Canadian Psychology/Psychologie canadienne*, 49, 14-23.
- Diener, E. D., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985). The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, 49, 71-75.
- Gagne, M. (2003). Autonomy support and need satisfaction in the motivation and well-being of gymnasts. *Journal of Applied Sport Psychology*, 15, 372-390.
- Geary, D. C. (1995). Reflections of evolution and culture in children's cognition: Implications for mathematical development and instruction. *American Psychologist*, 50, 24-37.
- 川人潤子・大塚泰正・甲斐田幸佐・中田光紀 (2011). 日本語版 The Positive and Negative Affect Schedule (PANAS) 20項目の信頼性と妥当性の検討 広島大学心理学研究, 11, 225-239.
- Nishimura, T., & Suzuki, T. (2016). Basic Psychological Need Satisfaction and Frustration in Japan: Controlling for the Big Five Personality Traits. *Japanese Psychological Research*, 58, 320-331.
- 大石繁宏 (2009). 幸せを科学する——心理学からわかったこと—— 新曜社
- Paulhus, D. L. (1991). Measurement and control of response bias. In J. P. Robinson, P. R. Shaver, & L. S. Wrightsman (Eds.), *Measures of personality and social psychological attitudes*. New York: Academic Press.
- Rocchi, M., Pelletier, L., Cheung, S., Baxter, D., & Beaudry, S. (2017). Assessing need-supportive and need-thwarting interpersonal behaviours: The Interpersonal Behaviours Questionnaire (IBQ). *Personality and Individual Differences*, 104, 423-433.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2017). *Self-determination theory: Basic psychological needs in motivation, development, and wellness*. Guilford Publications.
- Ryan, R. M., & Frederick, C. (1997). On energy, personality, and health: Subjective vitality as a dynamic reflection of well-being. *Journal of Personality*, 65, 529-565.
- Sheldon, K. M., & Filak, V. (2008). Manipulating autonomy, competence, and relatedness support in a game-learning context: New evidence that all three needs matter. *British Journal of Social Psychology*, 47, 267-283.
- 高山範理 (2015). 日本語版活力感指標 (SVS-J) の開発と検証 第29回環境情報科学学術研究論文発表会, 33-36.
- Watson, D., Clark, L. A., & Tellegen, A. (1988). Development and validation of brief measures of positive and negative affect: the PANAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 1063-1070.

(受稿10月31日：受理11月26日)